
僕の世界～精霊の物語～

藤川 円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の世界〜精霊の物語〜

【Nコード】

N3884X

【作者名】

藤川 円

【あらすじ】

男から女になってしまった元チート魔法使い今チヨイチートのシャルと、ものすごい剣の使い手だが身体が小さいく不死の少年イースの新たな旅物語。

新たな始まり（前書き）

新たな旅？というか元々行く予定だったエメシス公国に向け旅立ちました。

以前よりユルイ感じで進行中・・・。

新たな始まり

僕は世界が憎かった。

こんな世界無くなってしまえばいいと思っていた。

満たされたいともがく飢えた日々。

しかし、ある日から世界が変わった。

愛されたい。愛したいと飢えていた世界が終わり。

1人の世界でなくなった。

初めて友人と言える仲間ができた。

自分の飢えを満たしてくれる人。

僕の望んでいたモノを与えてくれる愛しい人。

この人を支えられるように強くなりたい。

僕は彼との旅でそう思うようになった。

それが今の僕の存在理由。

「目障りだ！」

もう何百回も聞いたセリフを吐いた少年は、人差し指を倒れている男たちに向け言い放った。

「もう少し相手見てからこい！盗賊野郎」

2人で旅を初めてもう半月になるが、1日1回は山賊やら盗賊やら野盗とかに出会うというかよってくる。はたから見れば少年の2人旅、襲われない方が珍しい話なのである。

しかし少年から言わせれば『弱い奴が俺に喧嘩を売るな』とやたら不機嫌になる。基本弱い者いじめが嫌いな正義感男な少年は、自分が弱い者いじめしているようで嫌になるらしい。少女は不機嫌になった少年をその度なだめていた。

「相変わらず強いですね・・・」

少年ことイースは太陽も霞むような金色の髪、瞳は海のような青色で整った顔立ちの小柄な身体の彼は、一流の剣の持ち主である。見た目はどう見てもお子ちゃまな彼は、昔かけられた本人曰く呪いのせいで不死身の身体になった。現在は呪いを解くため、水晶を探し世界を旅している。

「シャルだつて以前より強くなってんぞ？」

少女の足元にも盗賊が数人転がっていた。倒した比率でいうとイース8のシャル2である。

「この状況で微妙なほめ言葉だね・・・」

少女ことシャルはとある国の第一王子だったのだが、気が付くと知らない野原にしかも女の姿で倒れていた。本人はなぜそのようなことになったのか身に覚えがなく、今は自分の本体が存在するのか調べるためイースと一緒に旅をしている。現在、ショートカットの髪に少年の格好をしている。最近は剣を少し修行中で、魔法の方も以前は回復系しか使えなかったのだが、最近水系の魔法も使えることが判明したため修行中である。

「とりあえず・・・身ぐるみ剥いじゃう?」

微笑みながら言うシャル。ここ半月でシャルもある程度遅しくなった・・・いろんな意味で成長していた。シャルにとっては、以前の自分では体験できなかったことが毎日目新しく興味があることだった。そして自分を支えてくれる友との旅は、シャルに今までない充実感を与えていた。

「そうだな・・・路銀も足りなくなってきたしな」

そんな日常の旅を2人は続けていた。

「ここがドール国の国境かぁー」

2人はドール国からエメシス公国に行くため旅をしている。現在ここはドール国とエメシス公国の国境で、精霊王の谷と呼ばれる所に辿りついていた。

かつてここは1人の青年が精霊王と契約し国を建国したことから精霊王の谷と呼ばれるようになった。それがエメシス公国の初代の王である。

「精霊とはどうやってら契約できるのかな？」

シャルがイースにふる。

「俺に聞く？分野じゃねえぞ」

暫く考え込むシャル。

「……………」

無言でイースを見つめる。

「なんだよ……………」

「長い事生きてて知らないのかと思って……………」

眉間に皺を寄せるイース。

見つめるシャル。

「すまん…………精霊なんて見たことなくて…………てか興味ない……………」

・関わりたくない」

心が折れたイースは遠くを見つめる。

「なるほど」

それを簡単に納得してしまうシャル。

「いやー、精霊との契約って精霊それぞれだからな」

「精霊個々で違うの？」

「らしいよ・・・詳しくは知らんがな」

「そうなんだ」

精霊は人間との契約の際に儀式的な事を強要する。

「知り合いは唇を求められたらしい・・・」

「うわぁ・・・僕無理だそれ」

他愛ない会話をしながら谷を越えるために2人は歩き始めた。

新たな始まり（後書き）

亀更新。

暴君といふ名の姫君？（前書き）

今回は短いです。

暴君という名の姫君？

精霊の谷を無事に通り過ぎ、近隣の町に辿りついた時だった。

「だから言っただけじゃん！ここは危険だから移住しろって！」

シャルにとっては初めての、イースにとっては聞きなれた声の持ち主が村人の胸ぐらを掴み脅していた。

「放してくれよお嬢ちゃん。俺達は先祖から代々この地に住んできたんだ・・・突然出て行けって言われても」

「はあ？私の言うことが聞けないの？」

村人に喧嘩をふっかけている少女は高らかな声をあげる。

「誰のおかげで平和に暮らせているのよ！この身の程知らずが！」

村人は困った顔でその他の村人に助けを求める。

「あんたじゃ埒がないわ。村長！村長を出しなさい！」

得体のしれない圧力を村人にかけている少女をイースが止めに入った。

「お前は何でそも上目線なんだ？」

聞きなれた声が耳に入ったのか少女の動きが止まる。

「イス？何であんたが此処に居るのよ？」

顔を見るなりそう言われたイスは同じ質問を聞き返した。

「メルーツこそ何で此処に居るんだ？国は放置か？」

2人の前に居る少女は、現在の目的地であるエメシス公国の王女メルーツであった。

イスのヘタレの大きな元凶になったこの王女は、存在だけでもトラベルメーカーであることは周知のことである。この王女が関わると事件が大事件に、怪我が大怪我にとレベルがあがることから人々に恐れられていた。

しかし国自体は栄えており、内政担当部門（王女の取り巻き集団）が主に行政を行うといった異例のダウントップ方式をとっていた。

「夢を見たのよ」

メルーツのこの言葉が新たな物語の幕開けとなった。

暴君といふ名の姫君？（後書き）

最近小説書く時間が無いよう・・・

暴君といじ名の姫君？（前書き）

相変わらず誤字と脱字です
すみません。

■暴君という名の姫君？

昔から精霊が見えた。

自分が望んだわけではない。

ただ・・・見えたのだ。

人間を見るように、はっきりと精霊を見ることができた。

彼らは私に優しくかった。

何でも教えてくれた。

過去。

未来。

現在。

何が起こるのか。

どうしたらよいのか。

どうなるのか。

彼らは私に教えてくれた。

世界を『守る』ことが『契約』であることを

それが私の存在理由であることを

彼らは私に優しくかった。

彼らにとって私は契約者^{エメシス}なのだから。

精霊の谷の近くにある町の宿屋で暴君^{メルーツ}は不機嫌な顔をしていた。
イースはあれやこれやとメルーツをなだめているが、効果はないよ
うだ。

「マジむかつく」

「こらこら、一応一国の王女がそんな言葉を使うなよ」

不貞腐れた顔全開のメルーツはイースの隣に座っているシャルの
方を見る。

「はあー」

見てすぐに大きなため息をつく。

「何だよ……」

あまりの自由ぶりにイースはあきれた声をあげる。

「その子が何なのか知ってるの？」

メルーツの言葉に、今まで傍観者だったシャルの心臓が音をたて
る。

シャルはメルーツを見た。

黒い長い髪をした少女は真剣に真っ直ぐ自分を見つめている。

無言という名の目に見えない圧力。

シャルはメルーツからそれを受けていた。

自分の顔色は今ものすごく悪いだろうと思いつながら、口の中の唾液を飲み込む。

圧力に耐えながらも瞳はメルーツを見つめていた。

「関係ねえよ」

長い沈黙をイースの声が遮る。その言葉にメルーツの圧力が若干緩くなるのをシャルは感じた。

「そいつが何者なのか知りたくないの？」

真っ直ぐな瞳がシャルを刺す。

「それがそんなに重要な事か？」

イースはメルーツを見ながら言う。

「何者かなんでどうでもいい。俺がシャルと一緒に居たいんだ」

その言葉にシャルは赤面し下を向く。メルーツは少し視線を逸らし、圧力をかけることを止めた。

「イースに春が来た」

が言うことを聞かないのよ。調べていくうちに何者かが精霊王を封印したらしくて・・・精霊王はこの町の近くの精霊の谷に居るはずなんだけど居ないし。それに精霊王を封印できるほどの力の持ち主が居るんだらこの町危ないじゃない、だから非難しろって言ったのに使えない奴め。兎に角私は精霊王の封印を解かないといつもより力が半減だし、困るから今から精霊の谷に行こうかと思ってるんだけど・・・あんた達もここまで聞いて知らんぷりはできないわよ？」

ニタアと黒い笑いをしたメルーツにため息をつくイース。

「シャルは嫌か？」

イースはメルーツに巻き込まれるのは慣れてるらしく、すでに関わることを決めていた。しかしシャルの方はメルーツに得体のしれない恐怖を感じまだ困惑している。

「私は」

シャルは何か言おうとした。

「何言ってるの？2人とも行くに決まってるじゃん」

メルーツの強制参加を決定する声にかき消される。

「お前は相変わらずだな」

飽きた声でイースがメルーツを見る。

「イースだってその子と一緒にの方が守りやすいでしょ？何かあつ

たら。この町に1人残すよりいいでしょ」

「それはそうだけど」

メルーツは今度はシャルを見つめる。

「もしかしたら精霊と契約するチャンスがあるかもよ？私に付いて来たら」

そう言ってメルーツはニヤリと微笑む。

シャル自身も1人この町に残されるのは嫌のようで。

「私も行きます」

と返答した。

「こうなったら善は急げよ！今すぐ行こう。さっさと行こう」

椅子から立ち上がり出口に歩き出すメルーツ。

「おい、待てよメルーツ」

そう言いながらイスとシャルも立ち上がり出口に急ぐ。

その雑音でメルーツが最後に言った言葉がかき消されたことにも気づかなかった。

『だって鍵がなきゃ行けないから』

そのメルーツは言ったことだ

暴君といふ名の姫君？（後書き）

時間が欲しす。

暴君という名の姫君？（前書き）

久しぶりの続きです。

暴君という名の姫君？

精霊の谷に着いたメルーツを除く2人はある光景を見て驚愕していた。

「さつき通った時にはこんなもの無かったのに……」

シャルが目の前にそびえたった巨大な扉をまじまじと見つめた。扉は重厚な造りの鉄製の扉だった。

なぜか懐かしさを覚えるその扉をシャルは只々見つめていた。

「条件が揃えば出現するようになってたのか」

イースがそう言いながらメルーツを見る。

「そう。この扉が出現する条件は今この時しかない」

メルーツは扉を手で触る。

ひんやりとした鉄の扉は固く閉ざされていた。

「私じゃ無理か……」

そう言いながらメルーツは考えこむとぶつぶつと呟く。

不意にそんなメルーツとシャルは目が合った。

その黒い瞳は、自分のモノとは同一の色でも否なるものであった。

「!？」

メルーツに見とれていたシャルは、自分がメルーツに扉目がけて

突き飛ばされたことに反応できず扉にぶつかりそうになる。しかし、ぶつかる一歩手前で固く閉ざされていた鉄の扉が自然に開いた。

シャルは突き飛ばされた勢いに対処できずに吸い込まれるように扉の中に居た。

扉の中は森であった。

岩が隆起している山間部にある扉の向こう側。

「森？ここが精霊界？」

シャルは森を見渡しながら言う。

目の前に広がるのは銀色の木々が茂る森。

シャルの心の片隅が何かしらこの森に懐かしさを感じていた。

「おーっ。本当に扉が開いたー」

扉を通り抜けて来たメルーツが軽い棒読みで言う。

「適当か！？」

メルーツの後を追うようにイスも扉を通り抜けてきた。

すると扉は自然に消えてしまった。

「「！？」」

扉が消えた事にイスとシャルは驚いた。

そんな2人を苦笑いしながらメルーツは歩き始めた。

「言っただでしょ？今この時しかないって……」

そう背を向けて言ったメルーツの表情は分からなかったが、とても悲しそうにシャルは聞こえた。

そんな事もお構いなしにメルーツは先に歩いて行く。

「おい！待てよ」

銀色に輝く森の中を3人は奥へと歩いて行った。

「やはり戦わなくてはいけないのですか？」

そう、これは昔の記憶。

「どうして戦わなくてはいけないのですか？」

そう何度も問う。

問い続ける。

何故？
何故？
何故？
何故？
何故？
何故？
何故？
何故？
何故？
何故？

「ただ・・・あなた精霊王の力になりたかっただけなのに何故？」

目の前の精霊王は手に持っていた剣を振り下ろす。

抵抗は？

否。

抵抗はしない。

したくない。

「あなた精霊王を愛しているのだから」

涙が頬を伝うのが判る。

身体が痛い訳ではない。

そもそも身体は存在しないのだ。

涙でさえ本当に流したかどうか……。

今になってわかった。

精霊王^{あなた}は私を恐れていたことを。

だから私は殺されたのだと。

「ううん……」

嫌な夢を見た。

おぼろげに思い出す。

誰かが誰かを殺した。

胸くそ悪いその夢を思い出そうとしたとき。

「大丈夫か？」

聞きなれた声が入ってくる。

自分は今どんな顔をしているのだろうか？

「……メルーツさんって変わってる人だね……」

そう言いながら傍らで寝息を立てているメルーツを見る。

見られないために顔を逸らす。

少しの沈黙。

「自分に正直でありたい」

「？」

その言葉に逸らした顔を元に戻してしまう。

「自分の全てを失った時にそう思ったと」

イスはそう言いながら苦笑いをする。

「偽りだらけだった俺は、きつと憧れていたんだと思う。ただ前を見ているメルーツが羨ましかった」

そう言いながら柔らかく微笑む。

自分が好きな顔だとシャルもつられて微笑む。

「確かに常識離れしてるし、空気読めない所もあるけど・・・」

顔を赤らめる仕草が少し嫌だった。

「1人の人間として尊敬している」

「うん」

そう返事をしたシャルはイスに寄りかかる。

そしてシャルは目を閉じた。

暴君という名の姫君？（後書き）

続きは年始かな・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3884x/>

僕の世界～精霊の物語～

2011年12月10日02時46分発行